

事業完了報告書

調査研究期間等

調査研究期間	令和3年5月11日 ～ 令和4年3月15日
調査研究事項	<p>《委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究》 夜間中学における教育活動の充実に向け、生徒の実態等を踏まえた必要な環境整備の在り方について、次の事項に関する調査研究を実施する。</p> <p>I. 教育課程に関すること II. 広報・相談体制の充実に関すること III. 都道府県・市町村間の連携に関すること IV. 教職員の配置・研修に関すること VI. その他夜間中学における教育活動充実に関すること</p> <p>【具体的な研究例】として</p> <p>①生徒の実態（高齢者や外国人など）に応じたカリキュラム・教材開発、およびICT機器を活用するなどした日本語指導等の充実について</p> <p>②フライヤー、ポスターなどを通じた広報体制の在り方と連携・充実について</p> <p>③専門スタッフ（通訳等）を活用した教育活動、相談体制の在り方と充実について</p> <p>④交流活動等を通じた学習による域内外の中学校等との連携、および今後の夜間学級の在り方について</p>
調査研究のねらい	<p>主に次の点について継続的な取組みとともに、1人1台端末をはじめとするICT機器活用についても可能な範囲で模索・試みをおこなうことにより、生徒の実態等を踏まえた教育・学習環境の更なる整備、充実を図る。</p> <p>ア. さつき学園夜間学級には従来から主として日本、中国・台湾、韓国・朝鮮国籍の生徒が在籍してきた。さらに近年、従来からの生徒層に加え、ネパール、パキスタン、インド国籍など、多様な国からの生徒の入学が増加してきている。これらの生徒のだれもがそれぞれの生い立ちや生活事情から、日本の義務教育の学習内容理解や、社会・学校生活の前提となる日本語について「読めない」「話せない」「書けない」など、多様な課題を有している。このような状況を踏まえ、従来からの高齢者を主とした生徒の読み書きを中心とする学習・生活課題、および外国人生徒の抱えている諸課題解決のための効果的な学習環境や指導、および生活指導の在り方、すなわち、年齢や国籍等、多様な在籍生徒に対する必要な教育・学習諸環境整備の在り方について研究する。</p> <p>イ. 国籍はもちろん、10代から80代までの年齢の生徒が在籍するという、多様な生徒実態に応じた教材の作成や、学習指導など</p>

に関する研修等を通じて、教科や日本語指導を中心に、様々な教育活動の充実に向けた工夫・研究を行う。

ウ. 日本、韓国・朝鮮籍の生徒は高齢化に伴い、病気や生活等に悩む生徒が多い。その一方で、外国人生徒を中心に近年増加している若年層生徒には、生活と学習の両立に関する悩みを抱えている者や、高校等への進学を考えている者もいる。そのような実態を踏まえ、前者には教育機会確保のための教育相談や生活相談等、安心して学習できる環境を整えるために必要な対応、生徒に寄り添った支援方法の充実に加え、個々の生徒のニーズを踏まえ、小学校段階の内容を含め生徒の年齢・経験等の実情に応じた教育課程の編成を工夫することについて、また後者には、生き方や進路を見据えた生活・学習相談と同時に、課外を含む学習指導・支援体制の充実を図るための工夫について研究する。

エ. さつき学園は国内で唯一夜間学級を設置している公立義務教育学校であり、在籍生徒の居住市は守口市を中心に大阪市、吹田市、摂津市、門真市、寝屋川市、枚方市、交野市、高槻市、大東市など広範囲に及んでいる。換言すれば、本学級は開設以来、夜間中学を必要とする広範な地域の人々に対し、義務教育の機会を確保するための重要な存在となっている。しかしながら、公立夜間中学の存在がそれを必要とする人々、および社会全般に認知されているとは言い難い状況が未だに存在することから、年に2回実施している生徒募集活動をはじめ、様々な機会、手段により広報活動をすすめているが、通学可能な地域において義務教育の機会を求める人たちの全てに情報が届いているとはいえない。そのような実態をふまえ、フライヤーやポスターの作成・配布等により、校区や守口市内をはじめ、近隣諸地域におけるより多くの人々に対して、長期的かつ効果的に夜間中学の情報を伝える広報活動について、その方法を工夫・研究する。

オ. 本学級で実施している交流活動は、小学校・中学校等を中心に他団体を受け入れ、ともに学ぶことを通じて生徒の発言・発表（外国人生徒の場合は日本語での発表）や、作文等への意欲を引き出すなど、生徒の学習活動において極めて重要な位置にある。同時にこの活動は、市内や近隣地域の小学校、中学校等の児童生徒や教職員、保護者等を通じた夜間中学への理解の深まりや、情報発信の機会ともなっている。さらに、交流機会におけるICT機器の活用を検討するなど、今後も続くコロナ禍における取組みの一層の工夫を図る。これらにより、本学級の特色である交流活動を通して、生徒の学習のより一層の深化・充実と同時に、地域社会と一体となった今後の夜間中学の在り方を

	<p>研究し、発信していく。</p>
<p>調査研究の成果</p>	<p>ア及びイ. ウ 学習や生活などの諸側面において外国籍の生徒が有する多様な諸課題の解決に向けて、より意義ある教育活動をすすめるため、1人1台端末の活用を模索するなど日常的に生徒の実情に即応した教材や連絡文書などを工夫して作成した。その際、日本語指導関係図書、アプリケーション、タッチペンの活用も試みることで夜間中学生の学習意欲向上につながった。また、高齢化がすすみ病気等に悩んでいる生徒、および様々な生活背景を有する多様な生徒に対し、教育相談や健康相談、生活相談、在住市の市役所や病院への付き添いなどを行うなど一人ひとりの学習環境を整えていくとともに、それらのための連絡文書や啓発的な教材、掲示物などを工夫して作成することにより夜間中学生の学習における安心感や自らの健康や学習をよりよくしていこうとする意識を高めることができた。</p> <p>エ これまでの研究等の成果を盛り込んだポスター、フライヤー等の作成や配布、活用方法について、募集活動等の様々な機会を通じて工夫するとともに、近隣地域の各市教育委員会などの関係諸機関との連携をはかりながら取り組みをすすめ、広く地域社会に配布することで、より多くの人々に対して長期的かつ効果的に夜間中学の情報を伝え、夜間中学の存在に対する認識の促進を図ることができた。その結果、フライヤー等を見ることによる問い合わせがあるなど、具体的な広報効果を見ることもできた。</p> <p>ア及びウ 職員会議において「クラスの様子」の情報交換を位置づけ、定期的に様々な課題を有する生徒の確認を行ないつつ出席が少なくなっている生徒には、家庭訪問、電話、郵送等での連絡を行っていくことで、生徒一人ひとりの課題への対応について教職員の共通理解を図りながら、課題解決に向けた取り組みを着実かつ効果的に進めることができた。その結果、全ての生徒に対する教育機会の確保を図るための校内の支援体制を構築するとともに、一人ひとりの生徒における学習への自己意識を高めることができた。</p> <p>ア及びウ 「日本語理解に関する課題」を有する生徒に対して通訳者を交えた生活、進路指導等の支援、相談、および行事や交流活動等におけるきめ細かな支援を行った。その結果、当該生徒の日本語理解が深まると同時に、教職員や周囲の生徒との意思疎通が図られたことで、学習や生活への前向きな意思が形成され、積極的に行動、発言することへと結びついた。</p> <p>高等学校進学を考える外国籍の生徒およびその保護者との進</p>

路相談などにおいて、通訳者を交えることで日本の入試制度等について正確に伝え、様々な進路の選択肢を提供することができた。同時に、生徒・保護者の生活・学習上の考えや悩みなどについてもきめ細かに把握できたことで、当該生徒の進路選択・決定をより円滑にすすめることができた。また、その過程で進路に向けた目的意識が明確になることで、課外における当該生徒の学習意欲が高まり、それに対応する校内体制をつくることもできた。

具体的な外国籍の生徒に関する支援方法として、課外に日本語を含めた個別の学習指導を行うことにより、日本語理解が深まり、周囲とのコミュニケーションが図られた。そのことにより、学校生活への積極的な参加、前向きに進路を考え、自己肯定感の高まりへと結びついた。

ア及びイ 外国籍の生徒など多様化する生徒の有する諸課題解決に資するべく、研修部中心にICT機器の活用等を含めた授業研究、教材開発を目的とした日常的な研究を行った。その際、日本語指導関係図書、一人一台端末・タッチペン等を活用した教材や授業展開等を試みることで、日本語指導全般に向けた教職員の認識とノウハウを深めることができた。また、生徒の学習への活用においては、集中力の高まりや「漢字を書く」学習課題に対する習得促進などを図ることができるなど、一定の検証を行うことができた。

イ及びオ 多様な背景を有する生徒一人ひとりの実態を踏まえ工夫された校内掲示、校内配布物、教材の作成や生徒自らが発表する場を定期的に設けることにより、生徒の学校生活や学習での発表などへの意欲を高めることができた。結果として、生徒集会や交流活動等の学校行事や授業において、日本語による生徒自身の思いの表現や発表機会の増加を図ることができた。また、掲示物等を昼間の生徒や地域住民、交流団体等の来校者の目に留まるように工夫することにより、外部への効果的な発信にもつながった。

ア及びイ 外国籍の生徒など多様化する生徒一人ひとりの「学び」の充実や諸課題解決に向け、夜間中学の今後の在り方をはじめ、意味ある効果的な学習や生徒指導の在り方について、講師を招聘し研究する計画を立てた。「日本語指導の充実」をテーマに実施予定であったが、コロナウイルスをめぐる社会的状況等の諸事情から、実施を次年度に先送りすることになった。

エ及びオ 年間の学びのまとめとして、生徒文集『まなび』の作成を通じて、生徒自身の生い立ちを振り返り、これまでの社会

的経験に対しての自己肯定へとつなげることができた。その結果として、「考えて、表現する」という交流活動や学習における成果の確認と同時に、地域社会と一体となった夜間中学の存在を発信することができた。また、社会状況を見据えながら可能な範囲で最大限実施した他市町村を含めた中学校や定時制高校等との交流会の開催を通じて、工夫・研究して作成した教材や掲示物などによる学習・交流の場の設定により、近隣諸地域への情報発信をより一層行うことができた。